

第4章 安曇野市の歴史文化の特徴



豊科郷土博物館 平成23年小企画展
山のある暮らし パンフレット写真

4.1 歴史文化の特徴の捉え方

当市の第2次文化振興計画の目次部分に「安曇野の文化を定義する際に安曇野から見える美しい山岳景観や田園風景を前提としなければ、この地で育まれた文化を正しく伝えることはできない」とあります。

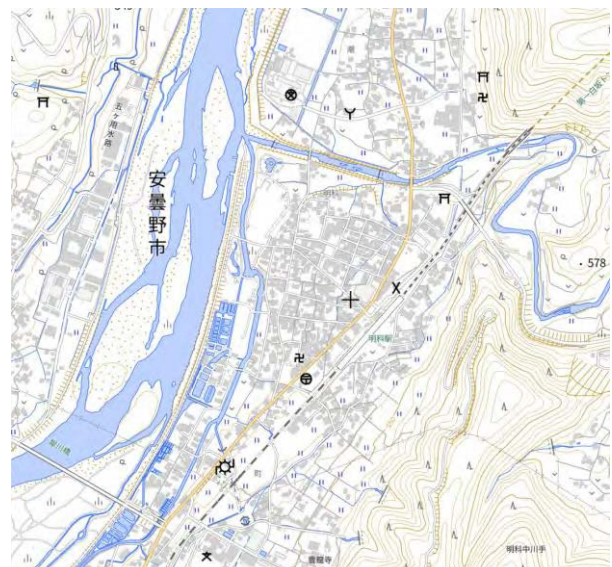
当市の歴史文化の重要な要素である山岳景観や田園風景をつくりあげた要因は、一帯の造山運動によって形成された地質条件に加えて、その後の風雨等の気象現象によって生み出されてきた雄大な大地であり、さらにはその上を流れる川や水です。

ここで当市の100年前と現在を比較してみます。昭和6年(1931)の明科地域の段丘下はほとんどが水田です。穂高地域の久保田も桑畑や森林が占めていました。人が住み始めてから約7,000年の間は、そのほとんどが大地の状態によって人の活動(暮らし)が左右され、たった100年の間の様々な技術の発展の中で現在のような姿に変わってきたことがわかります。土地と水を重要な視点としてとらえることは、当市の歴史文化の特徴を見出す上で大切な切り口です。



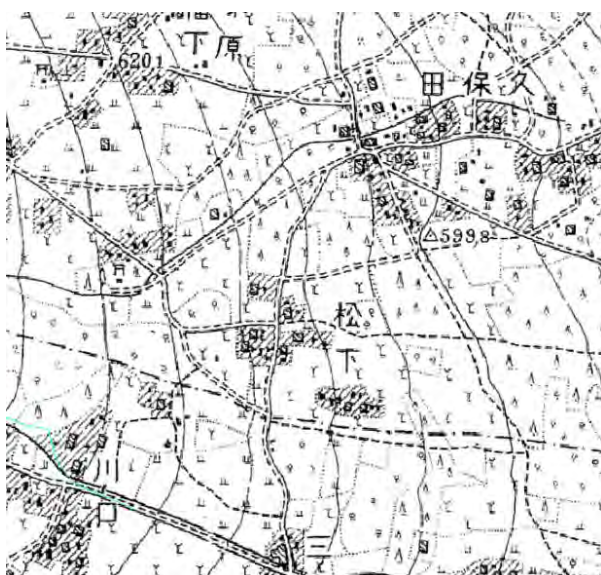
出典：国土地理院発行2.5万分1地形図(昭和9年発行)

図4.1 約100年前(昭和6年)の明科



出典：国土地理院発行2.5万分1地形図(平成25年発行)

図4.2 現在の明科



出典：国土地理院発行2.5万分1地形図(昭和9年発行)

図4.3 約100年前(昭和6年)の久保田



出典：国土地理院発行2.5万分1地形図(平成25年発行)

図4.4 現在の久保田

第4章では、こうした視点をもちつつ、第1章～3章の内容を踏まえ、この地の成り立ちや当市の地質や地形を出発点に、人の暮らしの誕生、その後の暮らしの定着に欠かせない水・自然を巡る歴史、水の調達の容易さの違いで生まれた地域の暮らしや産業の発展過程等に目して、当市の歴史文化の特徴を整理します。

歴史上の出来事や人々の暮らしの変化を整理し、「歴史の特徴」を下図に示す複数の層に分け、設定します。

第2章で確認した自然的・地理的環境、社会的状況、歴史的背景に加え、第3章で確認した文化財の特徴から「歴史の特徴」の積み重なりを把握し、当市の成り立ちを理解することで、歴史文化の特徴を捉えます。

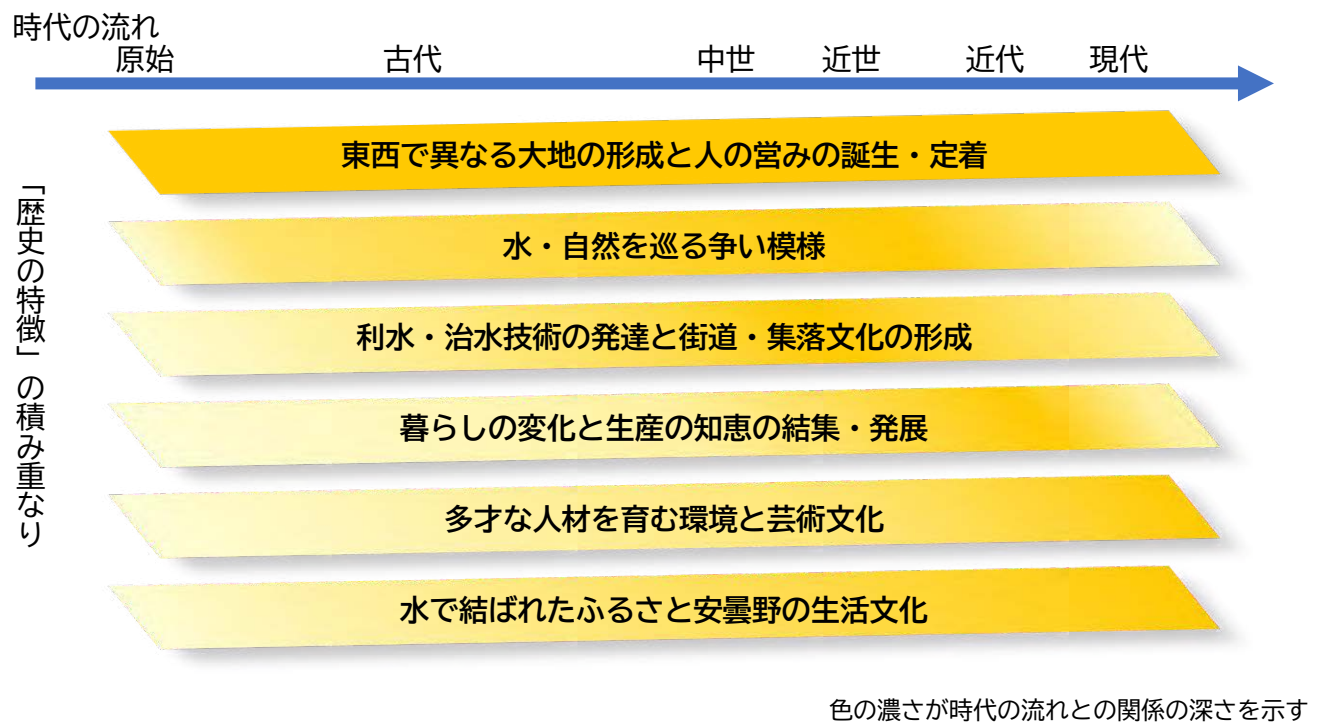


図4.5 「歴史の特徴」の積み重なりの概念図

4.2 安曇野の歴史の特徴

(1) 東西で異なる大地の形成と人の営みの誕生・定着

◆東西で異なる地史に由来する環境

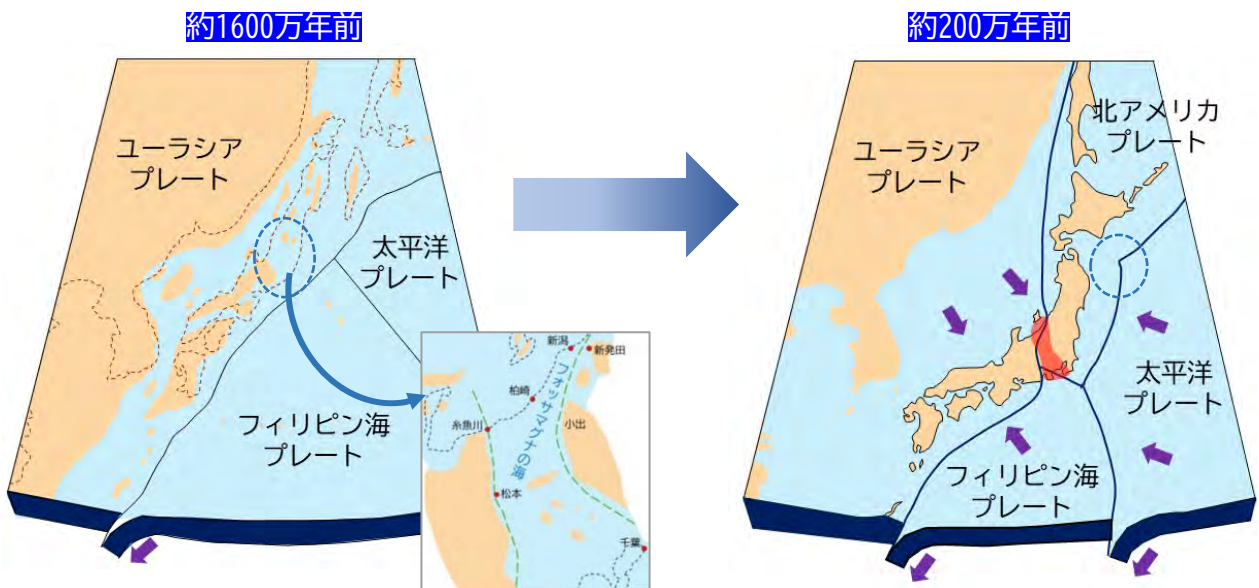
北アルプスのうち常念岳から南側は、海洋プレート上の堆積物がプレート境界に沈み込む際に大陸側に押し付けられてできた付加体と呼ばれる中生代の堆積岩類が、北側はマグマが地下深くで冷えて固まった新生代前期の花こう岩類が分布しています。

後に日本列島の一部となるこれらの地層・岩石は、2,000万年前頃までアジア大陸の一部でしたが、大規模なマグマの上昇により大陸から切り離され始めました。

約1,600万年前には、日本海と日本列島の骨格が形成されはじめ、本州の中央に位置するフォッサマグナの地域に海が進入しました。

東山には、この頃に海底で堆積したフォッサマグナの礫岩・砂岩・泥岩等の堆積岩や、陸化した後に堆積した砂礫、火山由来の堆積物などが分布しています。これらのうち別所層、青木層からは貝類、魚類、海生哺乳類などの化石が産出し、当時の環境をうかがえます。

約200万年前には、地下のマグマの上昇により西の山地が隆起し、北アルプスが誕生しました。その後約160万～80万年前の間に神城-松本盆地東縁断層が活動を開始し、断層の東側が押し上げられることによって松本盆地が誕生しました。



出典：『北アルプス発見ガイド』より作成

図4.6 日本列島形成のイメージ

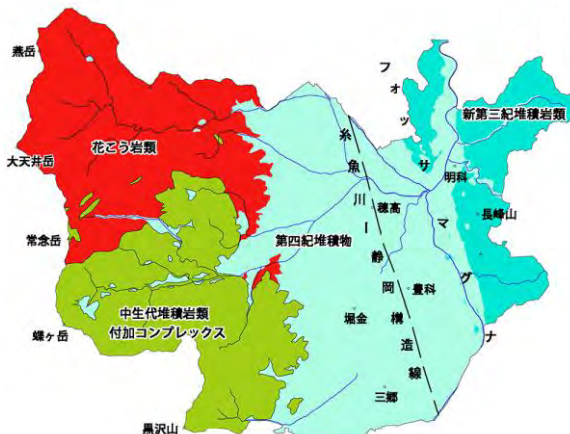


図4.7 当市の地質図



図4.8 魚の鱗の化石
(別所層、長峰山にて採取)

◆西の複合扇状地・東の河岸段丘の特徴的な地形の誕生

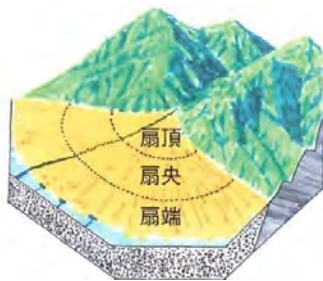
松本盆地が誕生した後、扇状地や、段丘といった地形が形成されました。

山から河川水が平地に流れこむ際に、河床の傾斜が緩やかになることで、山地から運搬された砂礫が堆積します。これが繰り返されることによって、下流に向かって扇形に広がる扇状地が形成されました。特に西側山麓では、大きな扇状地が複数発達し、複合扇状地となっています。扇状地は水はけがよく、りんごなど果樹栽培に適した土地となっています。

盆地に流入する北アルプスや松本盆地の降水は、扇状地や平地の砂礫層に浸透し地下水となりますが、さらに下には水を通しにくい岩盤が広がっているため、盆地全体が大きな水がめとなっています。犀川・穂高川・高瀬川の合流地点付近は、松本盆地で最も標高が低いため、この水がめからあふれた水が湧き出ています。また、大地の隆起にともない、河川の下方浸食が進み河床が低下することで、河岸段丘が発達しました。特に明科・豊科地域の犀川流域では顕著で、高いところで高低差20mにも及ぶ段丘を形成しています。

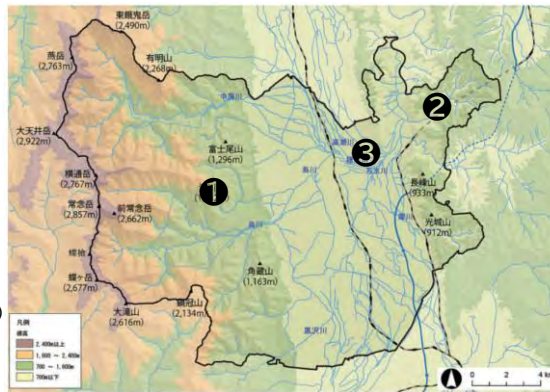
こうして、扇状地、段丘などの特徴的な地形が発達し、安曇野の現在の生活の場になりました。

①複合扇状地の形成



出典：楽しく学ぼう！安曇野の郷科書（2014）

安曇野市の標高区分図



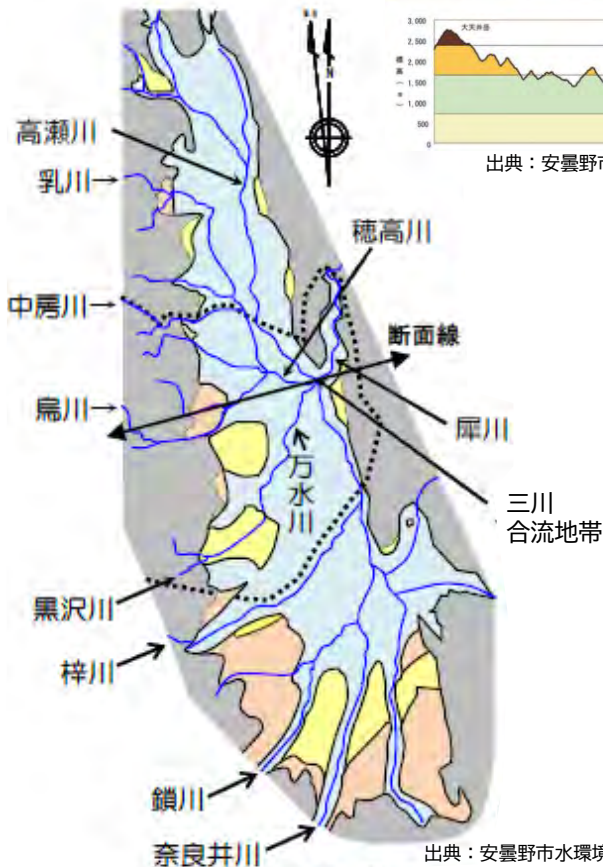
出典：安曇野市版レッドデータブック

②河岸段丘の形成

犀川・梓川沿い



隆起

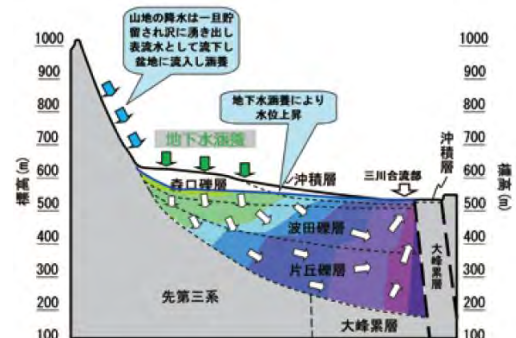


出典：安曇野市水環境基本計画



出典：明科町の埋蔵文化財第6集 栄町遺跡

③湧水地帯の形成



出典：安曇野市水環境基本計画

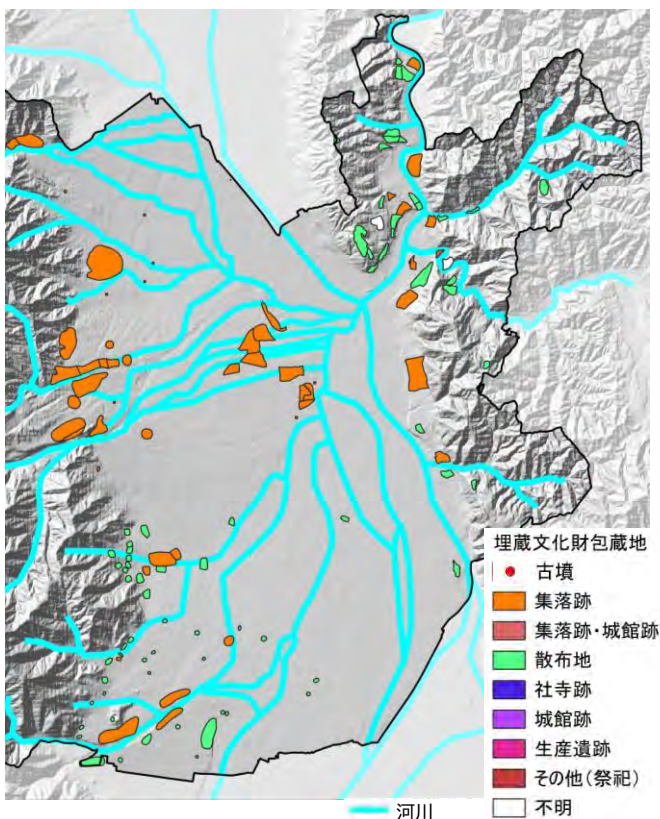
図4.9 地形の形成

◆人々の暮らしのはじまり

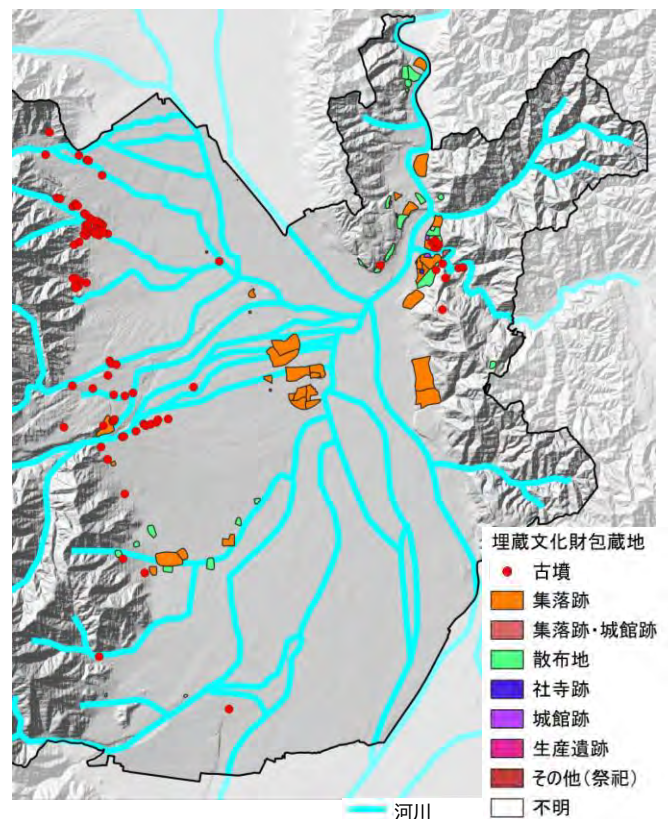
当市で発見された縄文時代の遺跡の多くは縄文時代中期から後期のもので、主に山麓に分布しています。山麓は水が豊富なだけでなく、山から木の実や動植物、道具類の原料等を得られる、自然に恵まれた豊かな場所だったでしょう。現在の市街地は扇央を中心に形成されていますが、利水技術が発達する前は安定した水を得られなかったり、水害の危険性が高い場所だったため、居住には向きませんでした。

大陸から稲作が伝わり、全国的に広まった頃を弥生時代と呼んでいます。当市における本格的な稲作の開始時期は弥生時代中期と考えられています。水田を作るためには、肥沃で深く耕することができる保水能力の高い土壌が重要で、河川からの導水も必要でした。居住にあたっては、水害に見舞われない安全な土地や、水害が起きやすくとも、導水しやすく、近くに耕作に適した耕土がある場所を選んだと考えられています。穂高地域の矢原遺跡群では、弥生時代後期から平安時代の集落跡が発見されており、烏川の水を管理したり、導水による水田開発をするための集落だったと推測されています。

古墳時代後期の古墳が確認されており、その分布は穂高地域を中心とした西山一帯と明科地域の大きく二つの地域に分かれます。西山山麓には南北10kmの間に100基以上の古墳が確認されており、その代表である「穂高古墳群」は、矢原遺跡群に居住していた、この地域の開発を進めた人々の築造だと考えられています。明科地域の「潮古墳群」からは銅鏡や勾玉が発見されており、都と結び付いた有力者の墓だった可能性を示しています。



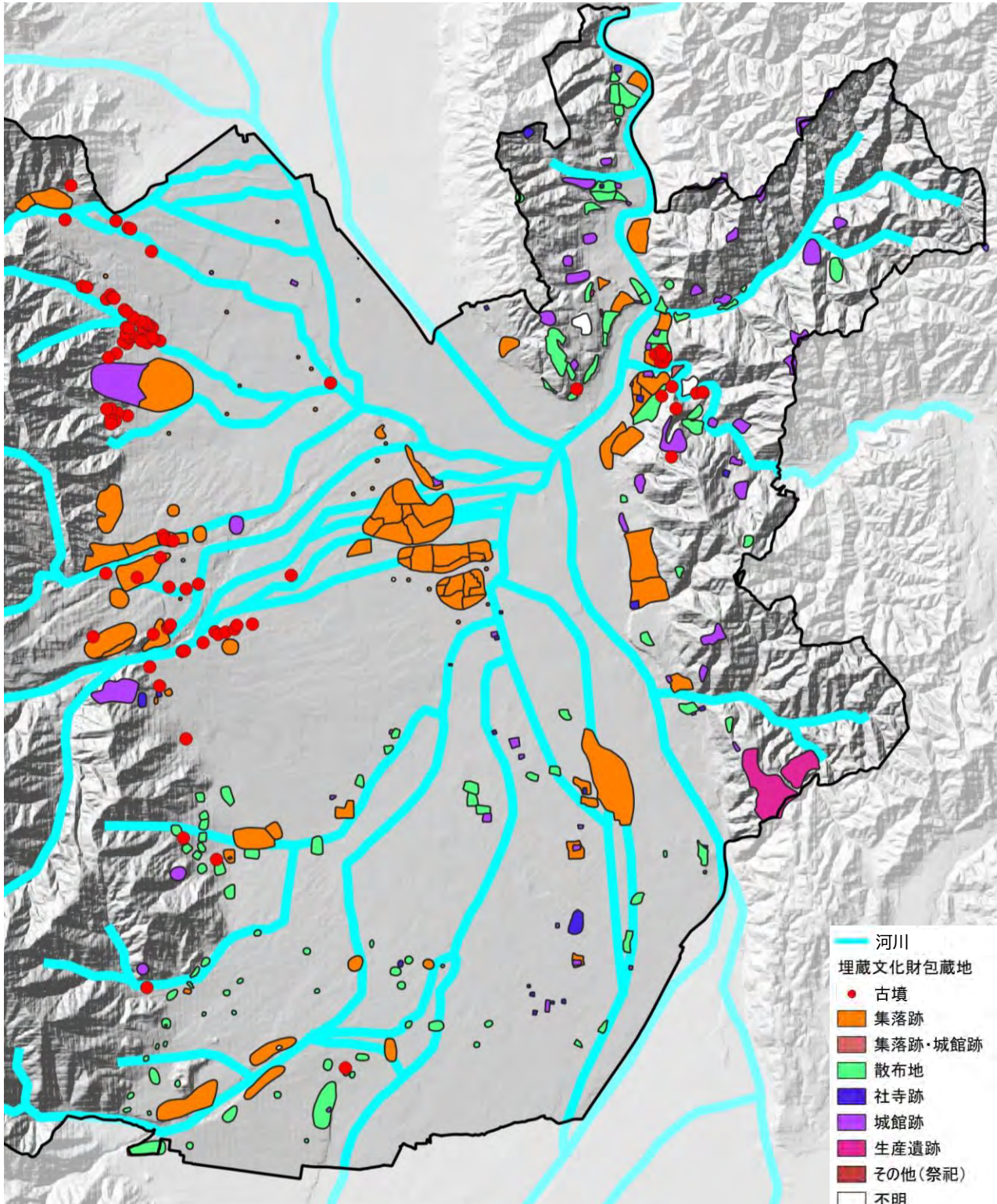
出典：『命の水 安曇平の水利史・豊科編』、庁内資料より作成
図4.10 縄文・弥生時代の自然流路と埋蔵文化財埋包蔵地



出典：『命の水 安曇平の水利史・豊科編』、庁内資料より作成
図4.11 古墳時代の自然流路と埋蔵文化財埋包蔵地

◆埋蔵文化財の種別と時代

当市の埋蔵文化財包蔵地は下図に示されるように、主に河川沿いまたは山麓地に数多く分布していることがわかります。集落跡は山麓部および三川合流部付近に多く、大規模な遺跡からは複数の時代にわたる痕跡が見つかっています。古墳はほとんどが山麓部に位置し、特に穂高地域では80基もの古墳がまとまっていることから「穂高古墳群」として当市の史跡に指定されています。城館跡もほとんどが山麓部又は山頂に位置しており、中世から近世にかけての時代に集中しています。



出典：『命の水 安曇平の水利史・豊科編』、庁内資料より作成

図4.12 埋蔵文化財包蔵地の種別および位置（全時代）

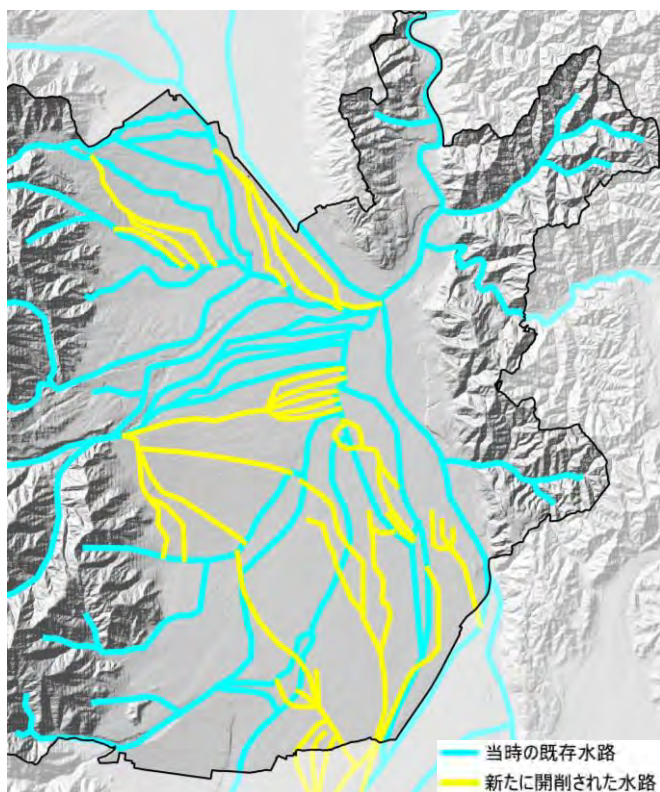
(2) 水・自然を巡る争い模様

◆河川の水を引き込んだ耕作が主体の時代

中世には、流通と土木技術の発達、また水を必要とする各開拓地の村々の協働作業人口の増加に伴い、幹線水路や大堰が開削されはじめました。この頃の堰は河川の上流部から標高に沿って流下させる「縦堰（58ページ参照）」が主でした。堰を開削するだけでなく、用水を争いなく使用していくための組織が、人々の生活集団の単位となっていきました。

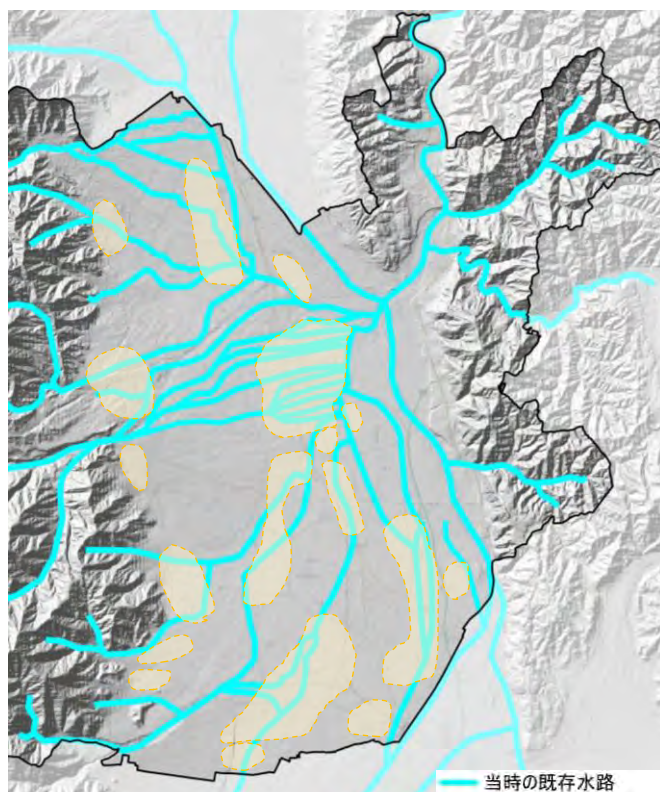
12世紀以降、矢原庄は伊勢神宮、住吉庄は皇室等の支配下にありました。また10世紀の『延喜式』に朝廷の直轄牧場として猪鹿牧の名前が記される等、この地域が中央の貴族や有力な社寺と結びついていたことがわかっています。室町時代には土豪や地侍と呼ばれる在地領主が支配し、館を構えました。戦国時代には、当市域も戦乱の渦に巻き込まれました。国衆の争いや近隣の戦国大名からの侵攻に備えるため、山城が築かれ、見晴らしのよい山の峰には見張り台等の防衛施設がつけられました。

地域の寺院等の大きな宗教施設の始まりもこのころです。中世以降の仏像や彫刻等が多く残されており、作物の実りや生活の安寧を求め、人々は神仏にすがったことが想像できます。



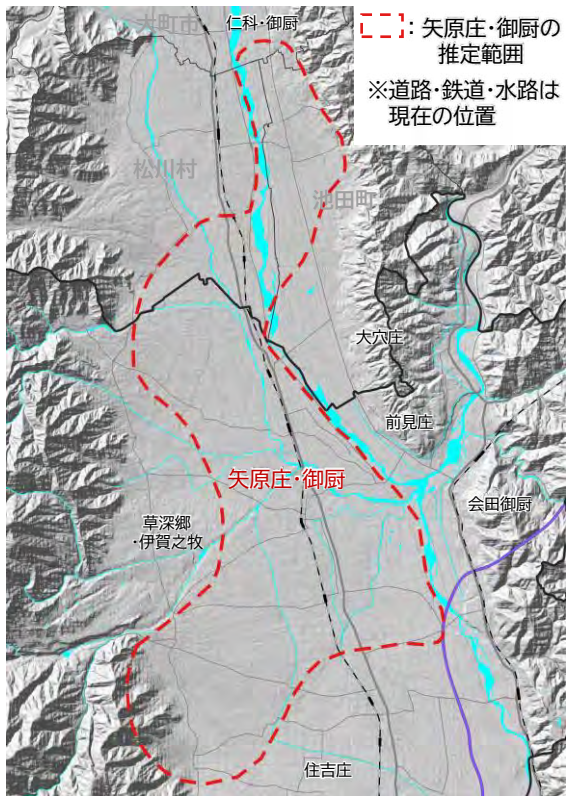
出典：『命の水 安曇平の水利史・豊科編』より作成

図4.13 平安・鎌倉時代に開削された水路

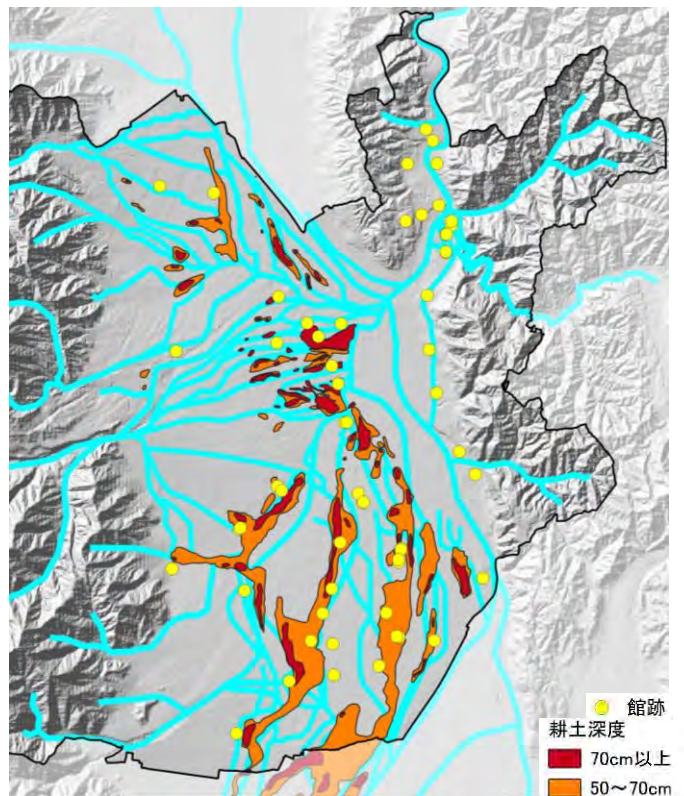


出典：『命の水 安曇平の水利史・豊科編』より作成

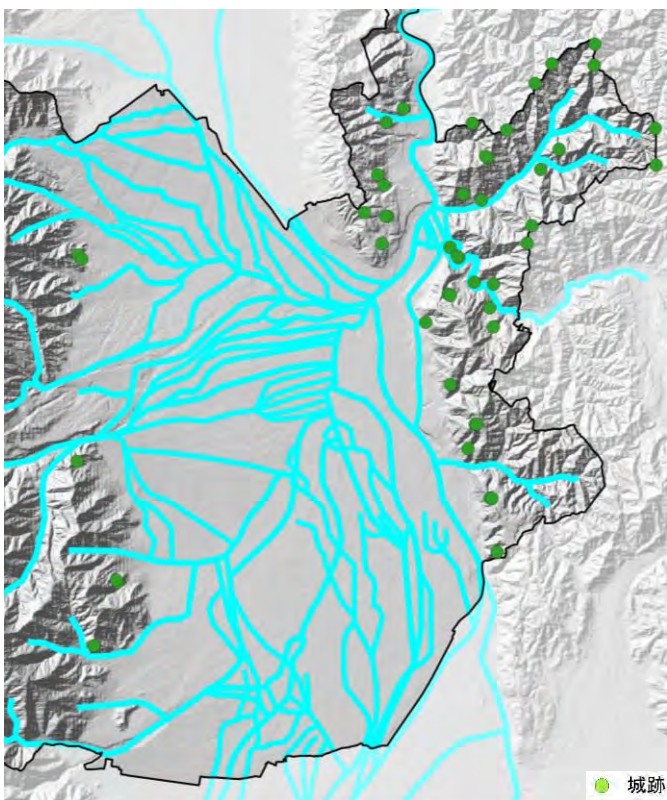
図4.14 9～10世紀頃の集落立地（推定）
（明科地域を除く）



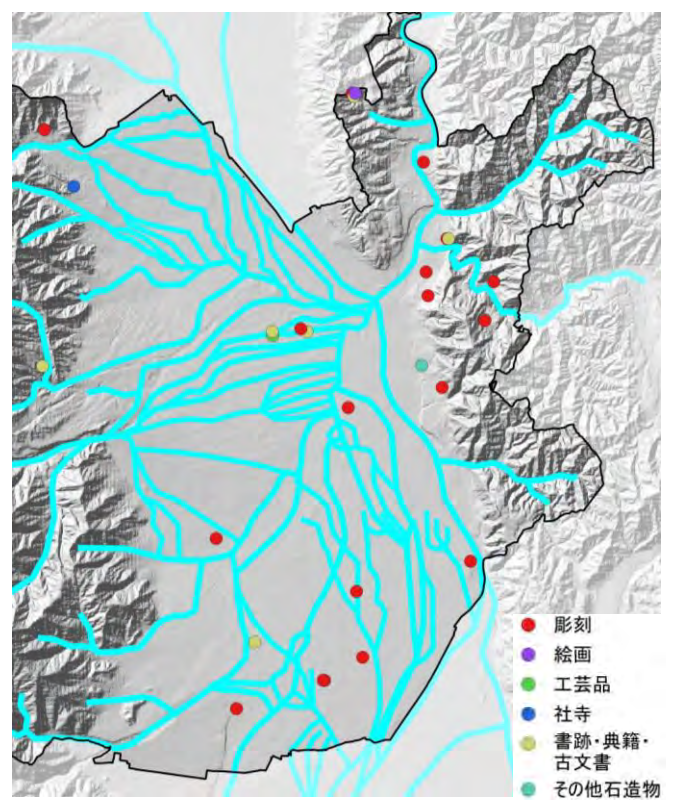
出典：『穂高の宝』より作成
 図4.15 矢原庄・御厨の推定範囲



出典：『命の水 安曇平の水利史・豊科編』、
 『土と水から歴史を語る』、庁内資料より作成
 図4.16 耕土深度と中世館位置
 (明科地域を除く)



出典：『命の水 安曇平の水利史・豊科編』、庁内資料より作成
 図4.17 城跡位置



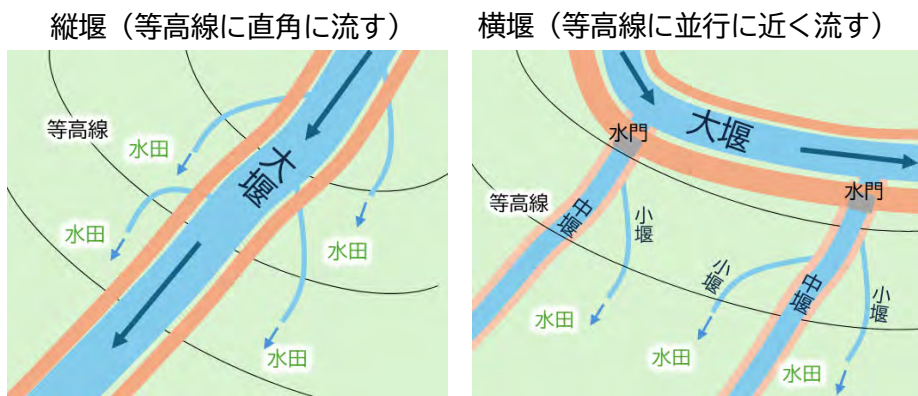
出典：『命の水 安曇平の水利史・豊科編』、庁内資料より作成
 図4.18 奈良時代～戦国時代の指定等文化財位置
 (城館跡を除く)

(3) 利水・治水技術の発達と街道・集落文化の形成

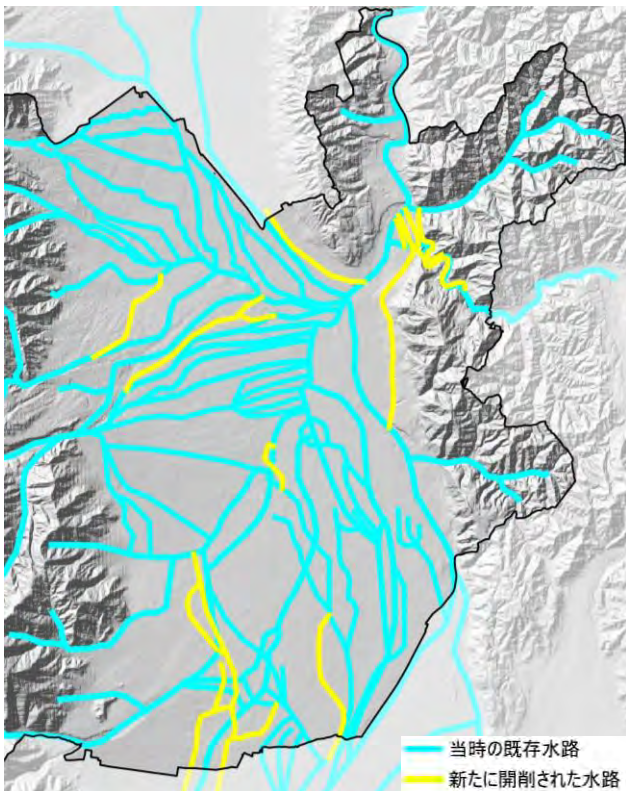
◆開削技術の発展

室町時代から戦国時代にかけて温堰が開削されました。温堰は梓川の上流部から取水し、総延長は11kmで、現在でも約1,000haの水田を潤しています。このような長大な堰を開削できるようになった背景には、流水を制御する技術や、鍛冶による道具生産の技術が広まったことが挙げられます。戦国時代には治水技術も伝わったと考えられます。

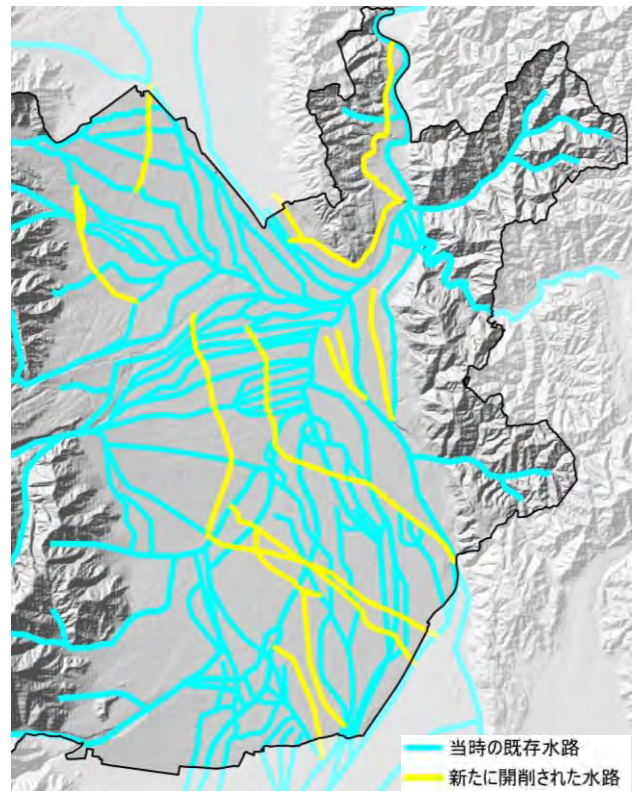
江戸時代には測量技術が進歩し、「横堰」の開削が盛んとなりました。当時水不足であった10村（後に11村）が共同で拾ヶ堰を開削しました。流れの変化や水不足により、梓川からの取水が難しくなったため、奈良井川から取水、梓川を横掘りして標高570mの等高線に沿って作られました。奈良井川の取水口から終点の烏川までの約15kmの中で、標高差はわずかであったということから（一説では約5m）、精度の高い測量技術があったことがわかります。



出典：『命の水 安曇平の水利史・豊科編』を参考に作成
図4.19 縦堰・横堰のイメージ



出典：『命の水 安曇平の水利史・豊科編』、庁内資料より作成
図4.20 室町・安土桃山時代に開削された水路



出典：『命の水 安曇平の水利史・豊科編』、庁内資料より作成
図4.21 江戸時代に開削された水路・五ヶ用水

◆暮らしの安定と流通の拡大

堰の開削により、耕作可能な土地が開拓され、その周辺に新田集落が形成されました。江戸時代中期には、現在の集落とほぼ同じ場所に人々が定住し、村の名称が今も地名として受け継がれている所が多くあります。

集落間をつなぐ交通網として、千国道をはじめとする街道や宿場町が整備され、多くの人や物が行き交いました。また、観音霊場として知られる栗尾山満願寺には、栗尾道と呼ばれる参詣道が整備され、各地から多くの参詣者が訪れました。天保6年（1835）に、小倉から鍋冠山・大滝山を越え、上高地を經由して高山へ至る「飛州新道」が開通し、当市と高山の間の交易を支える重要な路線でした。

河川輸送も人々の生活を支える重要な手段で、江戸時代から明治時代にかけて、犀川通船による河川輸送が盛んに行われました。川沿い各所には渡船場が設けられ、交通や物流の手段として渡し舟が利用されていました。



出典：『ふるさと安曇野 きょうきょうあした No.29』
図4.22 江戸時代の村位置

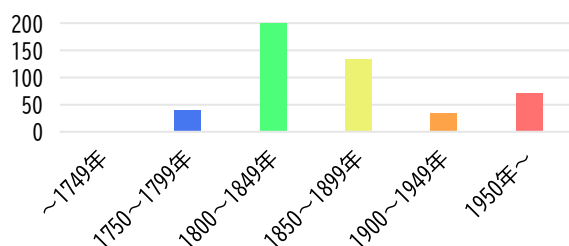
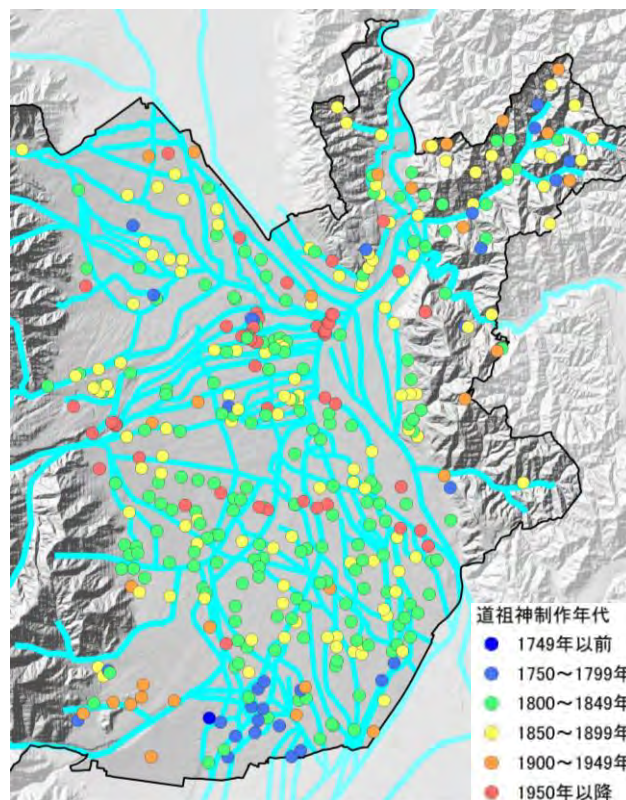
◆道祖神と祭礼

道祖神は、疫病退散、五穀豊穰、家内安全等を祈願する身近な守り神として、市内各地で祀られています。「塞の神」ともいわれ、悪病や疫病等邪悪なものが集落に入り込まないように、辻や村境、峠等に祀られたのが始まりとも考えられています。道祖神の制作年代をみると、1800年代以降、急激に増加したことがわかります。道祖神を信仰の対象とした祭祀は現在でも道祖神祭、三九郎（小正月の火祭り）等といった形で受け継がれています。

船型に組まれた山車の「オフネ」を曳いたり担ぐお船祭りは、江戸時代前期には始まっていたことがわかっています。



図4.24 穂高神社の御船祭り



出典：庁内資料
図4.23 道祖神位置および制作年代 (位置・制作年代が明確なもののみ)

(4) 暮らしの変化と生産の知恵の結集・発展

◆養蚕による生活の変化

江戸時代、松本藩は桑を植えることを奨励し、養蚕が行われ、夏秋蚕の飼育が可能になると急激に養蚕業が普及し、水田に適さない土地の多くが桑畑として利用されました。有明では天蚕（ヤマコ）が飼育され、天蚕糸が生産されました。

養蚕業は屋内で蚕を飼育するため、蚕室や養蚕住宅が建築され、住居の規模が大きくなりました。当市の農村風景を代表する板葺や茅葺の家屋は、屋根が高く、煙出しの越屋根がある等、養蚕による影響が色濃く残っています。

太糸紡織機（ガラ紡）が発明され、大規模な紡績工場が進出する等、第二次産業も大きく変化しました。繭や蚕種取引の中心であった豊科駅周辺は「豊科銀座」と呼ばれるほど商業地として発展し、料理店や芸妓等が集い、花柳界としても繁栄しましたが、その後の時代の変化とともに衰退していきました。



図4.25 天蚕の繭



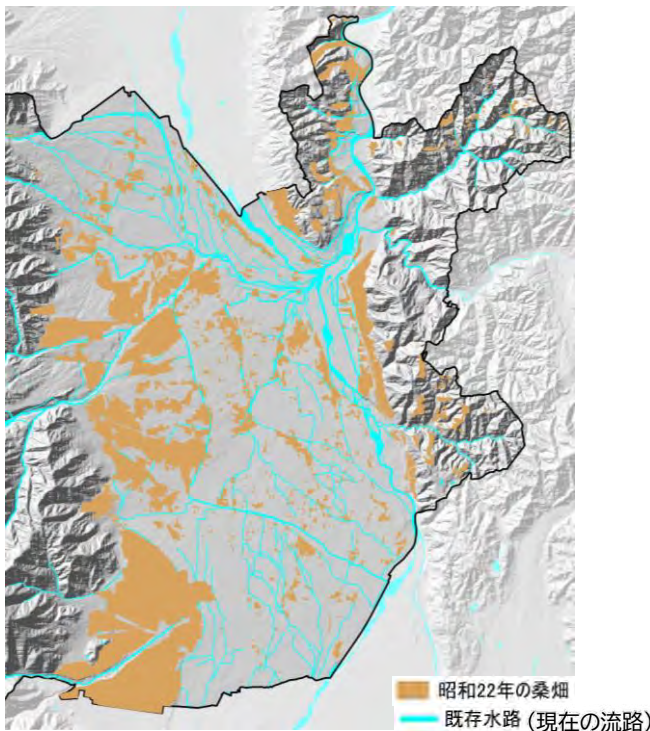
図4.26 豊科銀座

◆食料増産・産業発展の流れの中で

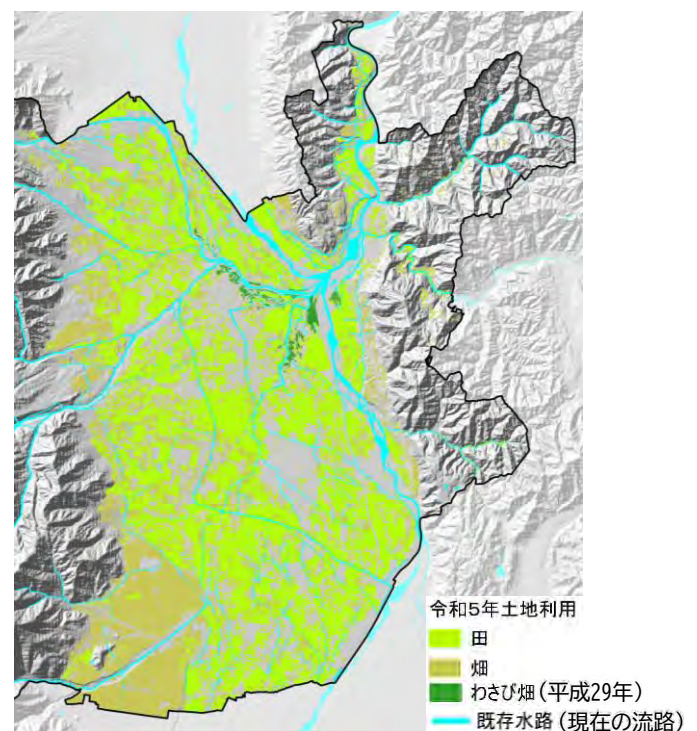
現在わさび栽培が盛んな地域は、もともと梨の特産地であり、梨畑の排水のために掘割にし、わさびを植えたことが始まりとされています。年間を通して湧水の水温が変わらないため栽培に適した環境であったことから、わさびは現在も当市を代表する特産物として知られています。

第二次世界大戦後、化学繊維の普及に伴い養蚕業は衰退し、桑畑の多くは水田へと転換されました。三郷地域に広がっていた桑畑はりんご畑へと変化しました。

犀川では鮭漁が盛んでしたが、下流でのダム建設により鮭の遡上^{そじょう}が困難となり、鮭漁は途絶えました。明治時代以降は豊富な湧水を活かしたマス類の養殖が普及しました。



出典：国土地理院発行2.5万分1地形図（昭和22年発行）より作成
図4.27 昭和6年の桑畑分布



出典：都市計画基礎調査、庁内資料より作成
図4.28 現在の農地分布

◆東山の発展

平成17年（2005）の当市の誕生の際、明科地域は唯一東筑摩郡からの合併でした。明科町では東山地域特有の地形に基づいた、独自の産業が発展していました。

東山の山間部は堆積岩と粘土層からなる地層が原因で、地すべりが発生しやすい地形です。地域の各所には馬蹄形の滑落面を残した地形が数多く見られ、地すべりによって形成された緩やかな斜面に集落が立地しています。

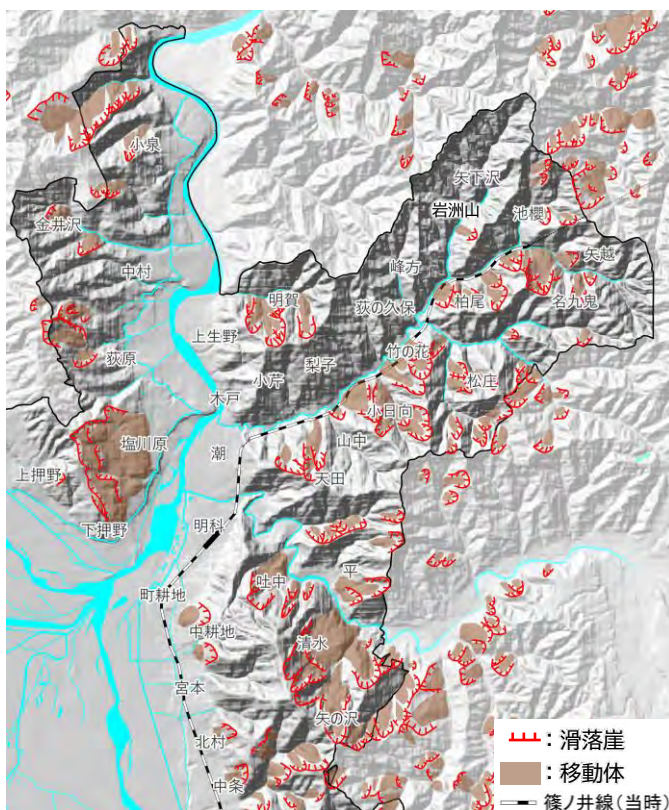
山間地では水田に向けた広い土地を確保することは困難であったため、麻やタバコといった商業的作物の生産が盛んでした。この地域周辺のタバコは「生坂たばこ」として江戸でも人気を博し、同時に江戸からの文化が入ってくる等、この地域の発展に影響を与えました。綿羊を中心とした畜産業も広がり、綿羊の競り市等も開かれました。他地域と同じく養蚕も盛んであったため、明科駅周辺には生繭取引場や製糸工場もありました。

明治35年（1902）には篠ノ井線が開通し、トンネルや橋梁は地元の明科煉瓦工場生産されたレンガによって作られました。明科駅前には旅客貨物の集積地として賑わい、明科国営製材所や金融機関の支店が設置され、料理屋や芸妓屋も置かれる等、東筑摩郡の中心地として発展しました。

そのほか、江戸時代には寺院が10か所、お堂が60か所以上あったとされ、信仰の場としてや、寄り合いの中心、寺子屋としても利用されました。岩洲山への峰通りは善光寺街道の裏街道として参詣者が通行したとされています。



図4.30 タバコの植え付け風景



出典：国立研究開発法人 防災科学技術研究所 『地すべり地形分布図』、農林業センサスより作成

図4.29 明科地域の地すべり地形および集落位置



図4.31 東川手の綿羊市



図4.32 第二白坂トンネル開通の記念写真

(5) 多才な人材を育む環境と芸術文化

◆貞享騒動と自由民権運動の先駆け

貞享3年(1686)の貞享騒動で、農民の窮状を見かねて身を挺して訴えを起こした多田加助らが「義民」として現在も称えられています。

明治13年(1880)、松澤求策は国会開設を求めるために^{しょうきょうしゃ}奨匡社を結成し、当市周辺の自由民権運動の中核的存在となりました。『国会開設ヲ上願スルノ書』を携え上京し、国会開設の請願を行ったり、貞享騒動をテーマとした『民権鑑加助面影』^{みんけんかみかすけおもかげ}という劇を創作する等、民権運動の推進に尽力しました。

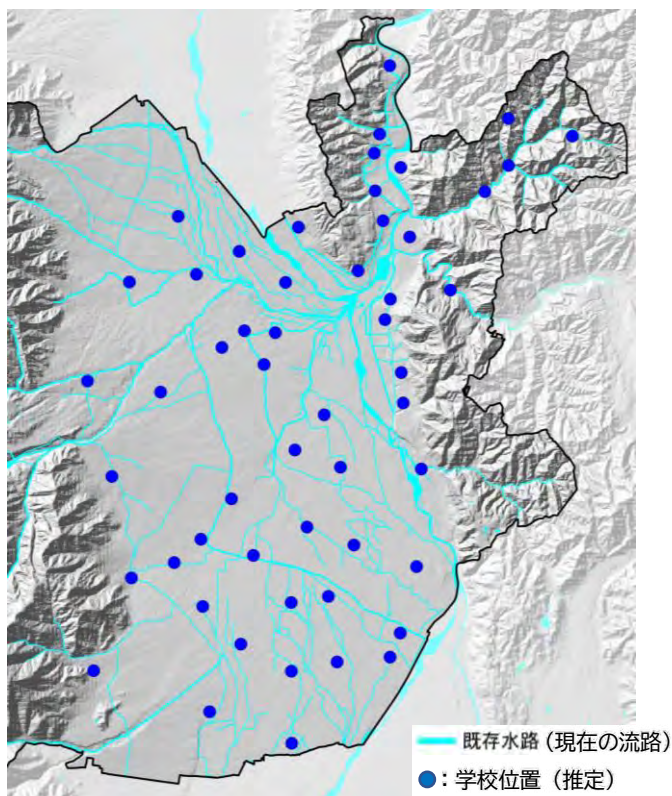
◆明治時代の学び舎と私塾「研成義塾」

明治5年(1872)、明治政府により学制が発令され、各地域の寺・廃寺、お堂等を活用し、下図に示すように学校が設置されました。その後統合が進み、現在の小・中学校が開校しました。

明治31年(1898)、井口喜源治は矢原に私塾「研成義塾」を興し、37年にわたり約800人を世に送り出しました。各種教科の授業に加え、キリスト教精神に基づく人格教育を行ったり、女子教育の重要性を説く等、「穂高の聖者バスタロッチ」とも礼讃され、信州教育に大きな影響を与えました。

◆小説『安曇野』

臼井吉見による小説『安曇野』では、当市出身の相馬愛蔵、荻原守衛(碌山)、井口喜源治らを中心に、明治から昭和までの激動する社会、文化、思想が描かれています。この作品は、安曇野の名を全国に広めたきっかけともなり、完結50周年を迎えた令和7年(2025)には、クラウドファンディングにより小説が復刊されました。



出典：庁内資料、一村限絵図より作成
図4.33 明治初期の学校位置(推定)



図4.34 研成義塾之跡の碑



図4.35 小説『安曇野』

◆戦争の記憶と平和の願い

純国産機「神風号」で東京-ロンドン間の世界最速記録を樹立した飯沼正明は、日本の航空技術の評価を高め、国際親善の役割も果たしました。その後陸軍の所属となり、太平洋戦争中に友軍機の事故に巻き込まれて死亡しましたが、国民の戦意高揚のため、「名誉の戦死」として報道されました。

当市ゆかりの人物による、戦時中の体制批判や自由主義を追求する声が残されています。私塾「研成義塾」にて井口喜源治の教えを受けた清澤冽は、フリーの外交評論家として日本の対米戦争に警鐘を鳴らし、アメリカとの協調路線を訴え続けました。太平洋戦争開戦後の昭和17年（1942）、『戦争日記』と題した日記を書き始め、戦後に『暗黒日記』として刊行されました。戦時下の軍国日本を痛烈に批判した著作として評価されています。

特攻隊員として戦死した上原良司は、その遺書が戦没学生遺稿集『きけ わだつみのこえ』の巻頭に掲載されたことがきっかけとなり、「自由主義に生きた特攻隊員」として全国に知られています。

当市域から動員された戦病死者数は明治以来1,836名とされており、戦死者の追悼とともに、平和への想いを込めた招魂社や軍馬碑が市内各地に残されています。金属不足のため鐘が失われた鐘楼や、燃料のための松根油採取跡、空襲を避けるための黒壁土蔵等、当時の痕跡を今でも見ることができます。太平洋戦争の戦局の悪化に伴い、都市部から長野市や松本市に集団疎開していた子どもたちを、当市域では「再疎開」として受け入れました。一方で、当市域からも「満蒙開拓青少年義勇軍」として、多くの子どもたちが満洲へと送り出され、命を落としたり、行方不明になったりしました。



図4.36 飯沼正明飛行士と神風号



図4.37 上原良司

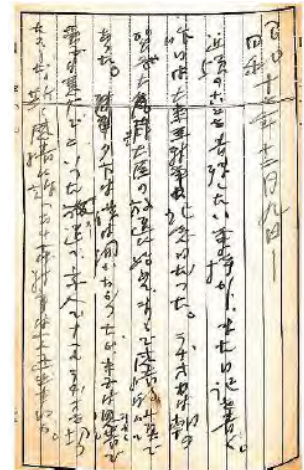


図4.38 『戦争日記』



図4.39 招魂社



図4.40 黒壁土蔵

(6) 水で結ばれたふるさと安曇野の生活文化

◆近現代の自然資源利用

明治37年（1904）に運用開始された宮城第一水力発電所は現在も稼働中です。中房温泉は古くからその効能が知られ、現在の中房温泉旅館は文政4年（1821）に開湯されました。昭和45年（1970）に穂高温泉供給株式会社が設立され、温泉を穂高温泉郷一帯に供給し、多数のホテルや旅館が営まれています。

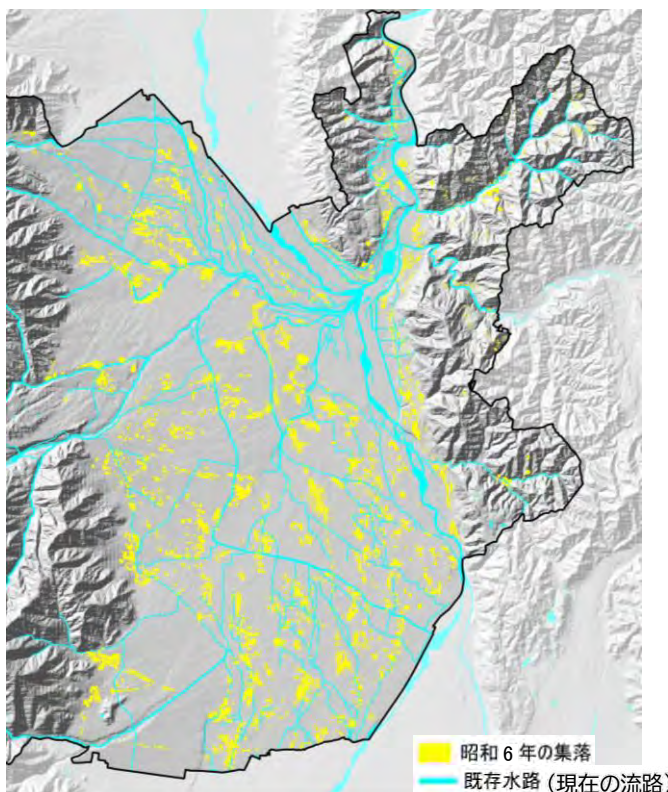
「日本近代登山の父」とも呼ばれる英国人宣教師ウォルター・ウエストンは、岩原の山口家に逗留し、地元猟師等の案内のもと、常念岳に登頂しました。現在では頂上稜線に山小屋が点在し、季節を問わず多くの登山客が訪れています。

昭和35年（1960）、穂高町学者村の開発が始まり、広大な別荘地が分譲されました。「自然を大切にしたい格調高い別荘地の開発」を謳い、昭和45年（1970）、当時自然に関心の深かった井上靖・東山魁夷・川端康成の著名な文豪・画家を招き、将来の開発の在り方に助言をいただきました。

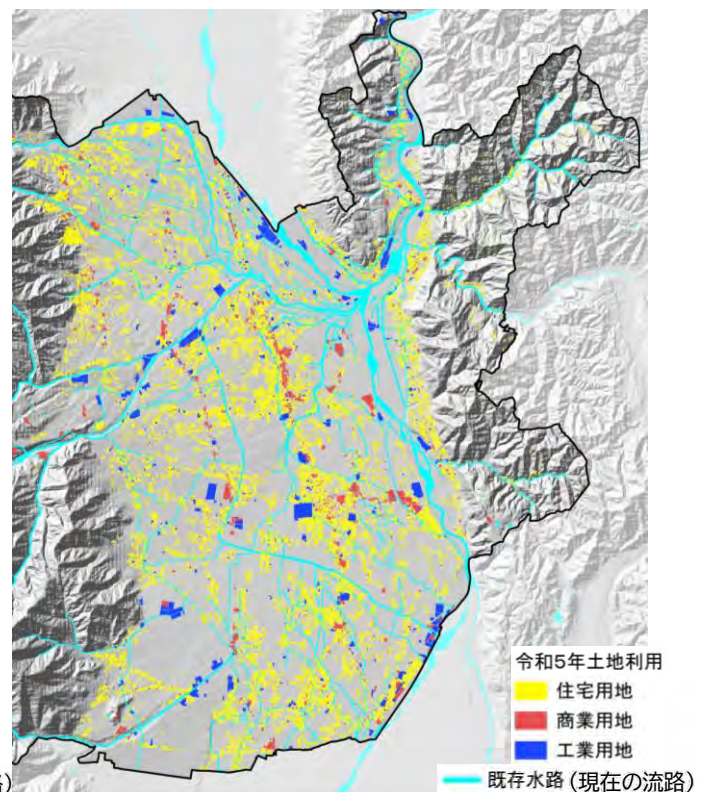
◆生活の近代化

戦後以降、当市の自然豊かな景観を求め、多くの人に移住してきています。昭和40年代には大規模な分譲住宅団地が造成され、昭和37年（1962）に完成した国道147号バイパス沿いには大型店舗が進出しました。

近代の生活スタイルの変化は文化に様々な影響を与えています。就業割合の変化により、必ずしも農業を行わない家が増加し、屋敷林や農家住宅は減少しつつあります。核家族化や地域とのつながりの希薄化により、文化や伝統を継承する後継者が不足する等の課題も深刻となっています。



出典：国土地理院発行2.5万分1地形図（昭和22年発行）より作成
図4.41 昭和6年の市街地分布



出典：都市計画基礎調査より作成
図4.42 現在の市街地分布

◆芸術文化が根差すまちへ

各地に残る美術作品は、様々な芸術家がこの地に生まれ、または移り住んだことを示しています。祖先が育んだ伝統や、豊かな自然環境が芸術家たちの創作活動の源となったのではないのでしょうか。戦時中にこの地に疎開したり帰郷した芸術家も多く、中信地区の美術界に大きな影響を与えました。当市にゆかりが深く、文化的な貢献が大きかった人物として、昆虫生態研究家で自然写真家の田淵行男、能楽師の青木祥二郎^{あおきしやうじろう}、社会派映画監督の熊井啓、漆芸家の高橋節郎の4名には名誉市民の称号が贈られています。それぞれ美術館・記念館での展示や信州安曇野薪能による公演等で、その功績の一端に触れることができます。

当市から白馬村にかけては美術館等が数多く点在し、17館を線で結んだ「安曇野アートライン」には多くの鑑賞者が訪れます。約50kmの間にこれほど多くの美術館等が集中しているのは世界的にも珍しいとされています。

当市では令和4年（2022）より東京藝術大学等と連携し、「アーティスト・イン・レジデンス」事業を実施しています。穂高鐘の鳴る丘集会所を拠点とし、アーティストが当市の風土や人の中に身を置きながら創作活動を行い、市民もその活動に直接触れることができる、貴重な文化交流の場となっています。

当市に残る伝統技術としては、お船祭りの人形飾り物の制作技術が挙げられます。山車の上には、歴史・伝説を題材にしたテーマで人形が飾り付けられます。穂高神社の御船祭りで飾られる「穂高人形」の制作技術は地元氏子の4団体により継承され、「穂高神社の御船祭りの習俗」の一環として県の無形民俗文化財に指定されています。現在では人形教室を開く等、制作の後継者育成に力を入れています。



図4.43 田淵行男「ギフチョウ」

明科町名誉町民
顕彰式典
平成2年（1990）

図4.44 青木祥二郎



図4.45 熊井啓



図4.46 高橋節郎「四季物語」



図4.47 穂高人形

4.3 歴史文化の特徴

前項で整理した当市の歴史の特徴の積み重なりから、私たちの今の暮らしの礎となる環境を先人たちが創り出し、その環境を守りながら、様々な糧を生み出して豊かな暮らしにつなげてきた流れが脈々と息づいていることがわかります。

この流れに着目し、「暮らしの礎となる大地」、「暮らしを守る人々の支え合い」、「暮らしの糧を生み出す知恵や技術」、という私たちの暮らしを取り巻く三つの視点から当市の歴史文化の特徴を整理します。

1) 暮らしの礎「安曇野」を創り伝える歴史文化

当市には、東西の異なる地盤が作用して誕生した大地を先人が拓き創り出した「安曇野」を暮らしの礎にして人々が様々な恵みを生み、これを肌で感じながら学び受け継ぎ、後世に多様な形の文化として伝え残してきた歴史があります。

一見、自然豊かと捉えられる当市の大地も、自然の現象や変化に多くを委ねて出来上がってきたわけではなく、先人の営みによって現在の暮らしが築かれてきました。人々が暮らし始めて以降、里山との共生に加え、堰の開削、新田の開拓、集落の形成等、多くの苦勞と知恵を重ね、この土地を生活の場として発展させてきた結果が現在の姿です。当市の西側では北アルプスから流れ出た土砂が形成した扇状地の不利な利水条件を克服して稲作を広め、東側では地すべりしやすい条件を克服してタバコ等様々な商品作物の栽培で地域の潤いを生み、この東西の地形の境目に湧き出す水でわさびや養鱒等の産業を発展させてきました。

さらに、このようにして生まれてきた当市の豊かな環境は、美術、芸術分野や全国の先駆けとなる思想に秀でた先人を生み出し、安曇野の風土を反映した様々な足跡が後世に伝え残され、受け継がれてきています。

2) 大地からの恵みで育まれた「暮らしを守り支え合う」歴史文化

国内でも有数の山岳環境の麓の土地という厳しい環境条件の中で、自然と闘い、時に水や土地をめぐる地域の争い等にも苦しみながらつくりあげてきた暮らしを、お互いに「守り支え合う」歴史文化が市内各所に息づいています。

利水条件の悪い扇状地や土砂災害の危険性もある地すべり地等過酷な自然環境と戦いながら、お互いに助け合って守っていく強い思いや願いが生まれ、その証として祭りや信仰が営まれてきました。木戸（キド）^(※)の守り神としての道祖神と道祖神祭り、集落の守り神としての神社と祭り、寺院での様々な信仰等、暮らしの単位ごとに様々な「支え合い」の姿が定着してきました。江戸時代の村にあたる83の多くの地区にこうした場や空間、ならわしがそれぞれあるのが当市の歴史文化の特徴です。

さらにお祭りや信仰は集落の枠も超えた形で存在し市内各所でお船祭りが営まれたり、穂高神社の遷宮で払い下げられた本殿が市内の別の神社の本殿に使われる等、深い結びつきが見られます。また、時には外部から侵入する敵との戦いもあり、その見張りの場所としての山城や城館跡が各地に残されています。

(※) 46ページ参照

3) 恵みを活かして「暮らしの糧を生み出し活かす」歴史文化

当市には、東西の地質や地形の違いに由来する多様な自然資源の特性を時代や環境の変化に合わせて読み解き、そこから恵みを生み出し、さらに新たな形で活かしていく歴史文化が息づいています。

先人の知恵と努力により近世の農業の生産力は向上し、生活様式が変化すると、江戸時代末期から昭和時代の前半までに、天蚕、養蚕、梨、わさび、りんご、養鱒等、生産活動にも様々な変化が生まれてきました。

また、近代の物流や交通網の発達により、豊富で清冽な地下水や冷涼な気候を活かし、県内でも有数の製造品出荷額を誇る都市にまで発展しました。

この流れは、過酷な自然環境や水や暮らしを巡る様々な争いを乗り越えてきた中で、人と人とが様々な縁を育みながら脈々と受け継いできた知恵や技術の賜物といえます。

以上の特徴を「雄大な大地からの恵みを賢く多彩(才)に活かし切った暮らしの歴史文化」と表現し、歴史の積み重なりと文化との関係についての概念図を下にまとめます。

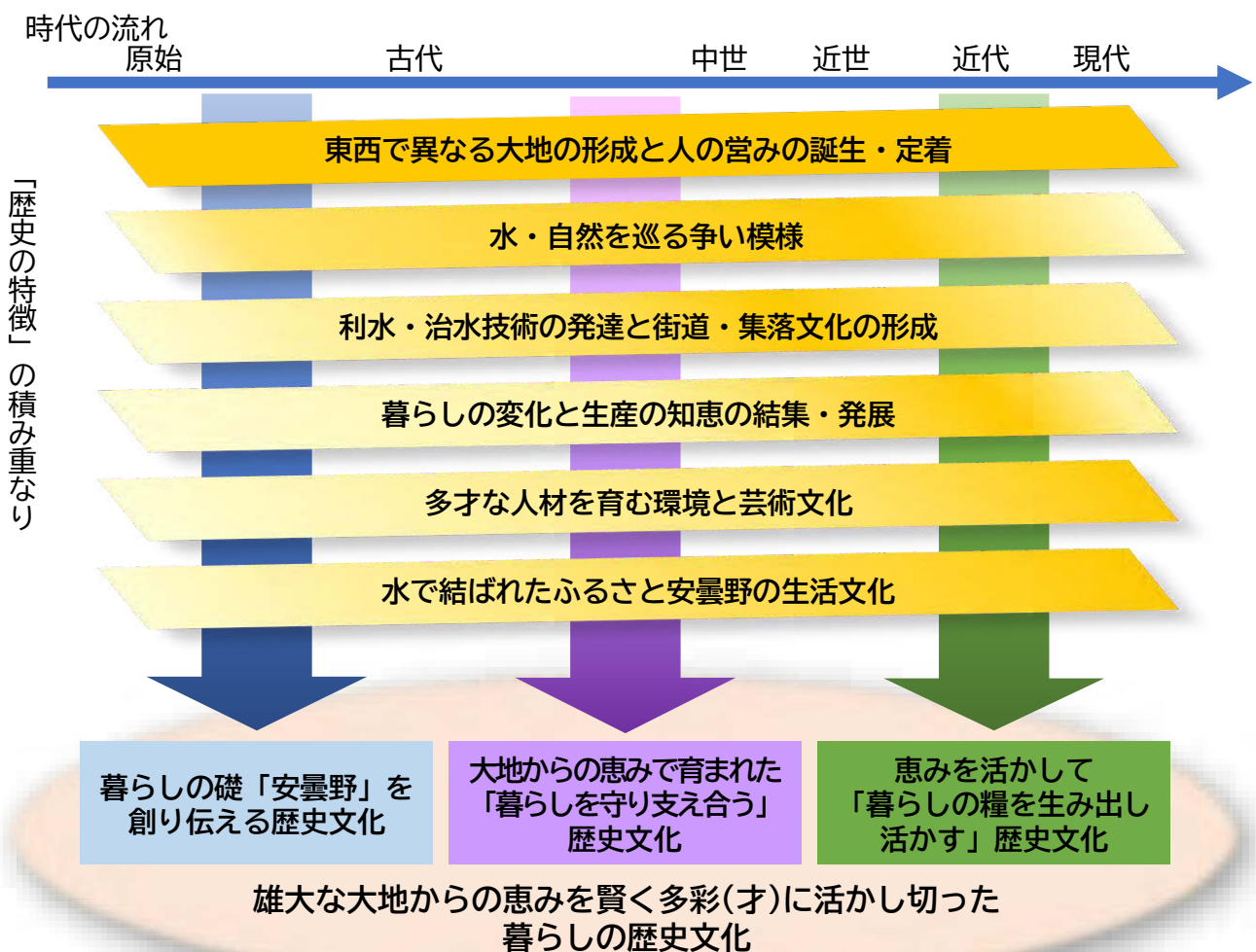


図4.48 当市の歴史の特徴の積み重なりと歴史文化の特徴の概念図

コラム 「地域の宝物」について考えてみませんか

当市では、令和2～5年度に、市民のみなさんに地域の歴史文化遺産（地域の宝物）への関心を高めていただく契機となるよう、市内の5地域の歴史文化遺産の魅力をわかりやすい形で発信し、地域ごとに「宝」としてまとめた冊子を刊行しました。

豊科の宝



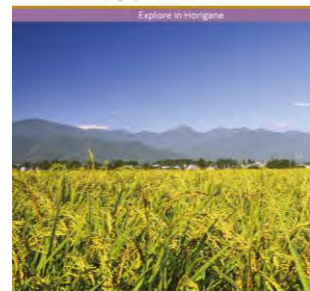
編集 安曇野市の歴史文化遺産再発見事業実行委員会

穂高の宝



編集 安曇野市の歴史文化遺産再発見事業実行委員会

堀金の宝



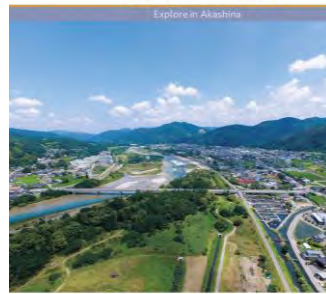
編集 安曇野市の歴史文化遺産再発見事業実行委員会

三郷の宝



編集 安曇野市の歴史文化遺産再発見事業実行委員会

明科の宝



編集 安曇野市の歴史文化遺産再発見事業実行委員会

*冊子の一般配布分はすべて終了しています。
いずれも当市内の図書館で閲覧もしくは市のホームページからもPDF版を御覧いただくことができます。

<https://www.city.azumino.nagano.jp/soshiki/43/64721.html>



『安曇野風土記』は、市民が地元の魅力を再発見してもらうため、また市外にも当市の魅力を発信するため、水、祭り、桜、美術の4つの切り口から安曇野を見つめ直した書籍です。



豊科郷土博物館等で購入が可能です。また、安曇野市文化課へのメールでも郵送申し込みが可能です。なお、詳細は下記のページでご確認ください。

<https://www.city.azumino.nagano.jp/site/kyoiku/75656.html>

